

くないような場合、特に腸管狭窄の存在を疑う小児や、穿孔などのため腹腔内へ造影剤が漏出するおそれのある症例にはこの値が非常に大であるとされている。また硫酸バリウムとの併用により胃粘膜の微細な変化をも現出しようといわれ、更に腸管機能亢進をもたらすことから大腸の迅速造影にも適するとされている。

本報告では Gastrografin (独 Schering 製) について検討し、この稀釈度と写真現出能との関係、硫酸バリウムとの併用による写真現出能の相違如何などを中心として述べた。

4. 〔症例検討会〕

心不全、呼吸器感染、精神障害を来たして死亡した弁

膜症の1例

(司会) 広沢弘七郎

全文を追って本誌に掲載の予定。

5. 〔綜説〕

親水性コロイドと逆性石けんの相互作用とその応用

(綜研) 佐藤 弘一

親水性コロイドと逆性石けんの相互作用につき、相対濃度、中性塩添加、加熱についての影響を簡単に述べ、それによつて親水性コロイドはいくつかに分類でき、更に中性塩に対する性質より各々の分離が可能であることを明らかにし、あわせてその応用例を述べた。

東京女子医科大学々会 第111回例会抄録

日 時 昭和37年2月23日(金)午後2時より

場 所 東京女子医科大学本部講堂

1. 脱コレステロール剤 (特に Triparanol) の効果について

(中山内科) 米谷 久代・森 陸

高コレステロール血症が動脈硬化症、特に冠状動脈硬化症と関係があるということは今や一般の見解となっており、動脈硬化症の治療の一環として高コレステロール血症を治療するということは重要視されている。しかし高コレステロール血症を治療するということは、経済的にも、また生活環境的にも種々の制約があり、一方薬剤にも血清コレステロール値を確実に正常範囲に戻すというものは最近まで見出されなかつた。

最近 Palopoli によつて合成された Triparanol は、血清コレステロールの生成機構の一部を障害し、ために血清コレステロールの生成を減少させるといわれ、わが国においても昨年来使用されている。

著者らは、最近 Triparanol を使用する機会を得たのでここに報告する。

対象患者は高コレステロール血症をもつ糖尿病8例、心筋梗塞症および冠動脈硬化症4例、計12例で、Triparanol を1日250mgから1500mgまでの間の量を1カ月乃至19カ月間投与して血清コレステロールおよび体重の推移を観察した。

成績: 12例中、全例に最高44%から21%、平均34.2%の血清コレステロールの減少を認め、リノール酸およびレシチンを主とした脱コレステロール剤を使用した例と比べ、血清コレステロール減少が著明であると思われる。さらに体重との関係をみるに、高コレステロール血症をもつ糖尿病、心筋梗塞症、肥満者計4例の患者に脱コレステロール剤を使用せず、減食療法を行ない、1カ月から5カ月間観察したところ、体重減少と共に血清コレステロールの減少を認めた。トリパラノール使用例では体重減少を示すものは僅かに2例で、血清コレステロール減少と体重とは関係が認められず、脱コレステロール作用はトリパラノール自身にあると考えられる。

4例に於て、薬剤中止後1月から7カ月間、血清コレステロールの推移を観察したが、1例は1カ月にて速やかに上昇し、2例は薬剤中止後1カ月および2カ月に依然として低値を示し、1例は3週後には正常値であつたが、7カ月後には治療前値を上廻つた。

副作用としては、軽度の白血球減少が1例に認められたが、薬剤中止後速やかに恢復した。その他認むべき副作用はなかつた。

2. 扁桃性病巣感染誘発試験法

(耳鼻科) ○鈴木千鶴子・佐藤カズ子・井上 浄子・